



広報誌 PLUS

第5号 発行日 令和6年6月

発行者 生活介護事業所プルスペース

～ 将来の生活を見据えて ～

管理者 金田 紘和

近年の福祉サービスは、「障がいを持たれている方が自ら選んだ住まいで安心して自分らしい暮らしを実現すること」を目標に掲げており、「地域移行」が求められています。この目標を達成するためには、福祉サービスの担い手やグループホームなどの住まいの場を提供するサービスの増加が必須となります。

一言に「福祉」といっても、担っている領域はとても広く、児童や高齢、身体、知的、精神障がいと様々な分野でニーズが生まれています。しかし、需要は高まり続けていますが「福祉離れ」は顕著にみられており、最近では「6K」（きつい、汚い、危険、帰れない、厳しい、給料が安い）という言葉も生まれているようです。事業を行うものとして話しにくい部分ではありますが、現状のままでは今後、福祉業界において担い手が増加してサービスの質が良くなり続けていくことは考えにくいと思います。

当事業所を利用されている方々は強度行動障害を有する方々ですが、半数はグループホームでの生活を送られ、ショートステイという形で将来を見据えた生活を送られている方もいらっしゃいます。いくつかのグループホームと関わらせて頂く中で、共通して挙がるのは、利用者さんの身体的な介護度や不穏時の行動の激しさではなく「集団での生活」にどこまで適応できるかということでした。

家庭内での生活とは異なり、少数の支援員で利用者の方の生活を支援する入所施設やグループホームでは「個別の配慮」はあっても、「個別での付き添い」は難しいことが殆どです。「食事を待つ」ことや「人のものと自分のものに区別をつける」こと、何より集団生活における様々な刺激に対して受け入れる力が求められます。

脱入所施設化の方針の基、本人やご家族が求める住まいの場を得ることはもちろん、住まいの場を確保すること自体が困難となってきています。受け皿の拡充を待つだけではなく、利用者の方が様々なスキルを身につけることで、希望するサービスに繋がっていくこともあるように思います。

いつかの将来、ご自宅での生活から離れなければならない日が必ずきます。数少ない住まいの場を選択する中で、より良い住まいの場に辿り着くためにも、他者との関わりを乗り越えられる力を学校や日中活動の場で育てていただければと考えております。



～ 1年間のかかわり ～



私が学んだことは、利用者の方々は関係性にシビアという事です。この人の声かけには応じるけれど、この人の声かけは受け入れたくない、という場面がしばしば見受けられます。もちろん私は後者であることが多く、ショックを受けることもあるのですが、もっと頑張らなければとやる気にも繋がっております！

プルスペースが理念として掲げている社会参加の場面でも、活動を共にする支援者の声が届かなければ危険が伴います。利用者の方々にとって安心して過ごせる相手となれるよう、良い関係性の構築に注力していきたいです。

支援員 甲斐 小百合



(有) 万葉堂
生活介護事業所
プルスペース

